

# RA の報告 I

白井亜希子（社会学研究科博士後期課程）

---

## 1 業務内容

### 予備段階

私は、2名の学生を担当した。レポート執筆に向けて学生のサポートをする、という業務が実質的に始まったのは、11月11日に行なわれた、RAと学生との初顔合わせの際であった。課題テキストに何を予定しているか、求められているレポートの形式や作業のおおまかな進め方は理解しているか、等の基本事項を確認した後、私は担当学生に、「定期的に面談をしないか」と持ちかけてみた。しかしながら、2人の反応は否定的であった。学生1は面談しても具体的に何を話せばよいのか分からないという困惑を感じたようで、学生2は就職活動のため大変忙しく、先々の予定がまったく立たないとのことであった。

そもそも、なぜ面談を持ちかけたかという点、私自身は昨年も同様の業務に携わった経験から「できれば直接に顔を合わせる機会が何回かあった方がスムーズに意思疎通がはかかれて良い」と感じていたからである。しかし、強制的に学生を呼びつけることは当然ながら不可能であるし、こちらの指導しやすさを重視するよりは、学生の側の都合や希望に合わせた形態でコミュニケーションをはかりたいとも考えていた。それに学生1は、この日に先立ってすでに選択した課題テキストの要約をRA統括者に提出しており、私も事前に目を通していたが、その要約は非常に完成度の高い仕上がりであった。また学生2は、昨年も同じ講義を受講し、研究発表もレポートの執筆もこなした経験者であった。

こうしたことから、以後の作業進行については比較的楽観的な見通しを持っても良からうと判断した私は、週に2日（月曜と木曜）9時から14時頃を常に空けて学生から要望があったときに面会する、ということに決め、①すでに読んだものでもこれから読んでみたいと思っているものでも良いので、レポート執筆の為に参考になりそうな文献を10本ほど挙げることにし、②課題テキストを選んだ動機と現段階での問題関心を簡単にまとめることにし、この2つを11月末までの課題として、顔合わせを終えた。

### サポート業務の基本方針

学生に対応するにあたっては、私なりに3つの基本方針を立てた。1つ目は、①学生自身の興味関心や素直な物の感じ方を殺さないよう、二次文献や「常識的」見解よりも自分の直感を大事にするよう励まし、私が何か述べるときには「指導」するのではなく一意見の「提案」といった仕方をとることである。昨年えた感触では、一橋の学生はおおむね飲みこみがよく、外から吸収した情報を整理して器用にまとめることに長けている。しかしその分、自分自身の素朴な考えをゆっくり温めながらテキストの読解を深めてゆくよりは、参考文献で面白く扱われていたテーマや他人の意見を過不足なくまとめて見せる方向に流れやすいように思う（これは、あくまでまったくの個人的見方である）。しかも、RAの指摘に対しては従順であり、無視することはあっても正面から反論しようとはあまり思わないらしい。そこで立てたのが2つ目の方針である。それは、②レポートを書き始める前からこちらの見解を伝えると学生はそれに容易に左右され、自己検閲に走りやすいので、まずは自由に書いた文章をメールに添付して送ってもらい、レポートを組み立ててゆく中で学生自身が見つけた問いについて一緒に考える方式を採ることである。

これらの事柄は、昨年も気をつけていたことだった。しかし、今回担当した学生は2人とも、自分で計画して自分で勉強し自分で書くことのできるきわめて自主性の高い学生であることが、やりとりの始まった当初から明らかに感じられた。したがって新たに、3つ目の基本方針として、③学生の側からはあまり積極的に意見や教示を求められることがないと予想されるので、かわりにこちらからどんどん催促して実際に書いた文章を見せてもらい、そこから学生が何を重要視しているか、何を疑問に思っているか、テキストのどのあたりで躓いているかなどの情報を最大限くみとり、学生自身が自力で考えをもう一步展開させられるようにさりげなくアドバイスすることに努めた。

### サポート業務の流れ

すでに述べたように定期的な面談はしないことになったので（結局、空けてあった面会時間にも一度も申し込みはなかった）、連絡はすべてメールで行なった。参考までに学生との間で交わされたメールの回数を示すと、以下のとおりである。

	RA → 学生	学生 → RA
学生 1	11 回	10 回
学生 2	9 回	7 回

細かいニュアンスが伝わりにくいメールという連絡手段のせいもあってなのか、レポート執筆が佳境に入るまでは、学生の側からはなかなか積極的な質問が寄せられなかったが、これは、事前に予想したとおりであった。学生1とは、研究発表の準備に入ってから最終的なレポート提出にいたるまでの期間(1月中)にもっとも多くやりとりしたが、それまではあまり連絡がなかった。研究発表をしなかった学生2は、むしろ課題テキストの思想的な位置付けや要約の仕方がつかめずにいた最初のころ(12月中)にやりとりが多かったが、1月以降はあまり質問もしなくなり、自力でレポートの完成にまで漕ぎ着けた。

しかしながら予想外であったのは、学生たちは2人ともきわめて礼儀正しく、真面目であったにもかかわらず、私が設定した中間報告のメ切は守られなかったということであった(ちなみに、最終的なレポート完成稿は、2人ともメ切までにずいぶん余裕を持って提出した)。まず、顔合わせの際11月末までに提出するよう求めた①参考文献10本の題名②テキスト選択の動機と問題関心は、1週間ほど遅れてやっと出揃った。また、その後も「現段階までに考えたことをまとまっていなくても良いので教えてください」とか「報告できる成果がなければ、何でも良いので質問を考えて送ってください」といったメールを何度か送ったが、そのたびに反応は鈍く、返ってくるのは「忙しいので何も送れません。申し訳ありませんがもうしばらくお待ち下さい」といったような寂しいメールばかりであった。12月のなかばには、レポートの構成と、各部分で何を書くかの大体の内容を月末までに報告するように連絡したが、これに対しても、正月休みも終わる頃になってようやく報告が届いた。

ただし、学生の名誉のためにも強調しておきたいのだが、設定されたメ切に遅れてはいても、届くのはつねにある程度推敲したのであろうことが伺える整頓された文章で、学生が自分なりのペースで勉強を進めていることがきちんと伝わってくる内容であった。私としては、さほど練り上げられた文章でなくとも、箇条書きのメモのようなものでも良いからこまめに提出してもらい、作業の途中経過を知りたかったのだが、学生の立場からすると、RAの介入を恐れてなのか自尊心の問題なのか理由はわからないが、それなりに自信が持てる輪郭や方向性が定まっていないものはRAに見せたくない、という気持ちが強かったようだ。

私が送った督促メールに対する返信を見るに、2人ともけして怠けているのではなく、他の講義で課されている複数の課題を並行してこなしたり、様々な用事との兼ね合いを考えたりしつつ、自分なりに計画を立てて時間をやりくりしているようであった。そうしたわけで、若干はがゆくはあったけれども、こちらもメ切を遵守するように重ねて厳しく注意したりはせずに、「メ切は目安なので遅れても良いですから、状況だけはおりおり報告

してください」とだけ伝え、うるさく催促しすぎてやる気をそいだり、連絡を取りにくい気持ちにさせたりすることだけはないよう、本人たちのペースを尊重したつもりである。

## 2 問題点＝反省点

### 「主体的学習をサポートする」ということの難しさ

さて、結果として、学生1は十分に準備をした上で見やすいレイアウトのレジュメと読み上げ原稿とを作成して研究発表に参加し、完成したレポートも、課題テキストの周到な要約に加えて自分なりの社会観も盛り込んだ力作となった。また学生2は、就職活動のあまりの多忙さゆえに研究発表こそ断念したけれども、自分自身が日常的経験のなかで感じている疑問から出発し、課題テキストをじっくり読み込んで着実に研究を進め、課題テキストの文脈に丁寧に寄り添って展開した説得力あるレポートを書き上げた。私にとっては、脱落者が出なかっただけでも嬉しいことであり、この結果には大変満足している。

もちろん、問題点＝反省点は多くある。昨年と同様、メールで連絡しあうのみで、直接に会って腹を割った話し合いをする機会が得られなかったことや、研究発表の準備とレポートの執筆を無理のない計画に基づいて進めてもらえるようなスケジュール管理がやはり難しかったことは、今後も継続的に検討してゆくべき問題として残った。しかしながら、今回の業務を振り返ってみると、去年はさほど意識しなかった1つの問題点が新たに浮かび上がってきたように思う。それは、ひとことでいうと、「主体的学習をサポートする」ということの難しさである。

すでに述べたとおり、今回担当した学生は両名とも非常に優秀で、こちらが口を出すまでもなく、一貫して自主的に学習に取り組んでいた。しかし、そのぶん、RAが設定したμ切よりは自分のスケジュールが優先となるし、書いている途中の文章にあれこれ言われるよりは、ある程度出来上がったものを見せて、自分が聞きたいポイントについての質問にのみ答えてもらい、能率的にレポートを完成させたいということにもなる。テキストの選択もレポートの内容の輪郭も、背伸びしてしまって後で苦勞することがないように予め計算しておく。最終的にレポートを提出しさえすれば単位は取得できるのであるし、RAと突っ込んだ議論を交わすことはメールでは難しく、かといって直接に会う時間は割けず、何度もRAに中間報告をしてそのつど書き直しを命じられては面倒が増えるから、連絡も最小限にする——極端に言えば、こういうことになるわけである。

「主体的に学習する」ことの意味が仮にこうしたことならば、「サポート」する者の居場所はない。せいぜい、学生の手間を省くために参考文献を揃えるぐらいしか仕事はなくなっ

てしまうだろう。具体的に例を挙げてみよう。実は今回、課題テキストを読解するためには勉強しておくことが（少なくとも私にとっては）それなりの重要性を持ちうると思われる事柄について、「トリビア的に教えて下さい」と軽く言われて面食らった。事柄自体は、歴史の入門書でも開けば解説が載っている。自分にとってはトリヴィアルなことで、参考までに知っておきたいだけという程度の関心であれば、そうした入門書でもざっと読むか、インターネットで検索でもすれば済む。大事そうだからよく知りたいというのであれば、「トリビア的に教えて下さい」ということはないだろう。恐らく、「何か質問があったらして下さい」と私にしつこく言われて「それでは……」とひねり出した、なんの悪意もない質問だったのであるが、この時ばかりは、しばし考え込んでしまった。

こうした問題を解消するためには、ひとつには、RA ないし TA がサポートをする演習連結型授業と一口にいっても、学生のニーズに応じて異なるいくつかのコースを準備し、学生たちが自分にもっとも合っていると思うコースを選べるように工夫することが必要なのではないだろうか。もちろんそのように学生の入り口を分けるにしても、そこからさらに個別に異なる学生の要望に対して柔軟に対応する必要はあるが、そもそも、「いまの自分を鍛えるためにはどのような指導と訓練が必要なのか」を考えて講義を選択することこそは、大学において主体的に学ぶことの第一歩ではないか。一方では、今回私が担当したように、誰かに指示を求めなくても自分で計画的に学習を進めることができ、かつ RA ないし TA と定期的にコンタクトを取ることは望まないタイプの学生がいる。他方、自分で意欲的に学習を進めることができ、さらに一步踏み込んで誰かと一緒にテキストを検討したり議論を交わしたりすることを望む学生も一定数いる。RA のサポートを受けるだけでなく、同じ本を読んでいる別の学生の意見も聞いてみたいという学生は多いのではないか（したがって、グループワークを取り入れることもこの場合は有効だろう）。そしてまた、自分で時間配分を考えて研究計画を立てたり参考文献を探したりすることに自信がなく、レポートらしいレポートを書くのも初めてで気後れしているような学生もいる。昨年も今年も、試験的な意味合いもあって RA ごとにサポートの方針が異なっていたのだが、学生は RA を選べなかった。担当 RA が決まってから漠然と「どうして欲しいですか」と聞かれるよりも、前もってどんな方針の RA がいるのか分かったほうが、勉強する自分の具体的なイメージがわくだろう。

もうひとつ重要なのは、学生に対して、少し背伸びしないと越えられないようなハードルを課すことであろう。無論、あまりハードルが高すぎるとは脱落者が出る。しかし、人が「誰かの意見を聞いてみよう」「相談しよう」と思うのは、低すぎるハードルではなく、少し高めハードルを前にしたときだろう。何よりも、今回私は、不当な干渉になってしまうことを恐れるあ

まり、学生に対して消極的になり過ぎたと反省している。どんどん厳しい反対意見をぶつけられたり読むべき文献を指示されたりしても、そう簡単には萎縮したりせず、かえって反発心も手伝って意欲を掻き立てられる学生もいるのだから、レポートの内容に対してもっと細かく踏み込んだ意見を——直接会えないなら、容赦ない長文メールでも——遠慮なく言ってもよかったのかもしれない。とくに、ある程度自分の力に自信がある学生にとっては、次々に新たな課題を与えられることは、それが自分の関心にそったものである限り、「認められているから新しい課題が与えられるのだ」という満足感につながり、良く作用することもあるだろう。

昨年も感じたことだが、学生のなかには、普段の生活のなかで得た経験や実感、問題意識を、もっと大学で学んでいる様々な知識と結びつけて表現し、自分なりの満足感や達成感をえたいという強い願望を潜在的に持ちながら、その機会も方法もつかめずにもよもやした気持ちを抱えている学生が多くいるようであると、今年もしみじみと感じた。中途退室しても誰も気づかないような大教室での講義では、そうした願望は満たされるはずもあるまい（おそらく教員にとっても、教壇から学生が遠すぎることは、けして望ましいことではないはずだ）。演習連結型授業の強みは、意欲を持ちながらそれを持て余している学生に、こうした願望を満たす場を提供できるところにあると思っている。この強みを発揮するには学生ひとりひとりに対するかなりきめの細かい対応が要求され、対応するための人員や時間も必要になるわけだが、学生総数が比較的少なく、しかも受験経験を経て自主的に勉強する習慣をすでに身に着けている学生が多い一橋でこそ、こうした取り組みも可能であり、有効であると思う。苦勞しつつもどことなく楽しそうに課題に取り組み、おずおずとではあっても用意した質問をぶつけてきたり、こちらの反応にまた悩んだりしている学生の姿が間近に見えると、アドバイスする側にも本当に新鮮な刺激が感じられる。引き続きこうした講義が開講されれば、私は喜んで関わってゆきたいと思っているし、できるだけ長くこの試みが継続されて成果が蓄積され、学生側からも多くの意見が寄せられることを望む。

---

白井亜希子（しらい・あきこ）

社会学研究科博士後期課程3年

専門分野：近現代ドイツ哲学・思想

研究テーマ：ヴァルター・ベンヤミンのメシアニズムについて

共同執筆『西洋思想の16人』（粹出版社、2008、「ルカーチ」「ベンヤミン」の項目を執筆）